

「底が突き抜けた」時代の歩き方 378

9・11以後は『新約聖書』の世界で起こっている出来事なのか

明治学院大学教授の加藤典洋が中心になって企画した、『9・11以後の国家と社会』(『論座』03.1)をテーマとするシンポジウムで、参加者の社会学者の見田宗介だけが非常にシンプルに『新約聖書』に向き合って報告しているのが新鮮に映る。

彼は9・11のテロや、それ以降のアメリカのアフガン報復攻撃や、マスコミに氾濫したおびただしい論評や言説を目にするなかで、「二十世紀に記された二つの文書」、D・H・ローレンスの『アポカリプス』と若い頃の吉本隆明の『マチウ書試論』を思い起ししたという。「あとで気がつくと、二つともキリスト教の源泉である『新約聖書』の文書を素材に、ある思想的な問題と格闘したもので」あり、「この事件が『キリスト教の問題』であると思ってい」なくとも、「二つの思考が共に、キリスト教の根本原典との格闘という仕方で生み出されてきたということは、また別の意味で、偶然ではなかったように思います」と、自分が二つの文書に注目する立場について説明する。

「アポカリプス」とは默示録のこと、「ヨハネの默示録」をふつう指し、ローレンスはこの文書を論じている。「マチウ書」とは日本語聖書では「マタイ伝」のこと、それが新約聖書の冒頭に置かれ、「ヨハネの默示録」が新約聖書の最後に置かれているところに、妙な配置すら感じられる。見田氏によれば、「ヨハネの默示録」は聖書編纂のなかで新約の最後におかれたものでありながら、内実は新約のなかで最も『旧約的』な部分、つまり、『ユダヤ教的』な部分です。『ヨハネの默示録』はむしろユダヤ教の文書であると断じる聖書学者さえいるくらいです。」彼は「ヨハネの默示録」が、「キリスト教徒のなかで、特に不遇な階級、民族、地位にあるキリスト教徒たちの間で、最も親しまれ、強い共感と支持を得てきた文書」と説明し、次のように内容を紹介する。

「これは現在この世界の中で富み、栄えているものたちの都が、神の仮借なき懲罰をうけてこなごなに崩壊し、現在不遇で、貧しく、この繁栄の都から疎外されている人々がそれに代わって栄光の座につく、という予言の物語です。この『悪徳の栄える都』は、当時の世界帝国ローマの都、ローマをあきらかに指していますが、聖書のなかでは『大きいなるバビロンの都』という神話的形象で語られています。バベルの塔という、当時の建造技術としては超高層建築というべきものをシンボルとするこの繁栄の都が、『神のテロ』ともいうべきものの暴力によって一瞬に崩壊する時の描写、『倒れたり。大きいなるバビロンの都は倒れたり。』以下の章句を、キリスト者たちは、特に不遇のキリスト者たちは、たとえば炭鉱夫であったローレンス自身の父親とその仲間たちに至るまで、

世紀から世紀の間、甘露のようにカタルシスのように愛好し、唱和し、黒々とした反逆と報復の夢想を共有して育んできたといいます。」

続いて、「崩落」の時の描写が聖書から抜粋されているが、彼の抜粋には（以下の）傍線の部分が省略されている。

「それゆえ、さまざまの災害が、死と悲しみとききんとが、一日のうちに彼女を襲い、そして、彼女は火で焼かれてしまう。彼女をさばく主なる神は、力強いいたなのである。彼女と姦淫を行い、ぜいたくをほしいままにしていた地の王たちは、彼女が焼かれる火の煙を見て、彼女のために胸を打って泣き悲しみ、彼女の苦しみに恐れをいだき、遠くに立って言うであろう、『ああ、わざわいだ、大いなる都、不落の都、バビロンは、わざわいだ、おまえに対するさばきは、一瞬にしてきた』また、地の商人たちも彼女のために泣き悲しむ。もはや、彼らの商品を買う者が、ひとりもないからである。その商品は、金、銀、宝石、真珠、麻布、紫布、絹、緋布、各種の香木、各種の象牙細工、高価な木材、銅、鉄、大理石などの器、肉桂、香料、香、におい油、乳香、ぶどう酒、オリブ油、麦粉、麦、牛、羊、馬、車、奴隸、そして人身などである。おまえの心の喜びであった果物はなくなり、あらゆるはでな、はなやかな物はおまえから消え去った。それらのものはもはや見られない。これらの品々を売って、彼女から富を得た商人は、彼女の苦しみに恐れをいだいて遠くに立ち、泣き悲しんで言う、『ああ、わざわいだ、麻布と紫布と緋布をまとい、金や宝石や真珠で身を飾っていた大いなる都は、わざわいだ、これほどの富が、一瞬にして無に帰してしまうとは』また、すべての船長、航海者、水夫、すべて海で働いている人たちは、遠くに立ち、彼女が焼かれる火の煙を見て、叫んで言う、『これほどの大いなる都は、どこにあろう』彼らは頭にちりをかぶり、泣き悲しんで叫ぶ、『ああ、わざわいだ、この大いなる都は、わざわいだ。そのおごりによって、海に舟を持つすべての人が富を得ていたのに、この都も一瞬にして無に帰してしまった』」（18章8 - 19）

富と権力を集中するこの「バビロン」の都の崩壊の描写が、9・11を経験した我々の目にどう映るかは今更述べるまでもないだろう。ローレンスは「圧倒的な軍事力と貨幣経済の力を以て世界を支配するこの帝国の首都」たる「バビロン」が、「古代ではローマ、宗教改革では再びカトリックのローマ、そして今日では『ロンドン、ニューヨーク、パリ』として不遇のキリスト者たちによって想定されてきたことを伝え」、大恐慌の1929年以降の「二十世紀の歴史の中で、『三都』は結局『ニューヨーク』へと引き絞られていき、9・11に遭遇することになるのだ。

「冷戦後の『一極構造』、パクス・アメリカによるグローバリゼーションという世界の中で、原初のキリスト教徒たちのおかれていた位置は、今日ほとんど、不遜なイスラム教徒たちのおかれている位置と、構造的に等価のものであるようにみえます。そしてイスラム教徒の目からは、この現代の『バビロンの都』はあたかも、キリスト教とユダ

ヤ教の首都であるように映じているのかと思われます。文明の二千年の間に、みえない巨大な反転があった。

反転はあったけれども構造は変わっていない。『アポカリポス』が、キリスト教の聖典の結部でありながら、『ユダヤ教の文書』と呼ばれることのあることをみてきたけれども、それは現代のイスラム教徒のうちの不遇の人々の、心情を映す鏡となっている。

それではここで、三つの宗教を貫いている『一神教』ということが問題なのだろうか。(中略)『一神教』という、異神を排斥する宗教の形態を否応なく生み出してしまった、現実の社会の中の関係感情というべきものがある。『一神教』という投射の形態の根元にあるもの、この社会的な関係の客觀性が生み出す感情の絶対性のようなもの、ここに問題の核心はあるように思う。」

パクス・ローマ時代に不遇をしいられてきた原初のキリスト教徒たちの位置は、二千年を経たパクス・アメリカーナ時代のなかでそのままイスラム教徒たちの置かれている位置に重なっており、不遇をしいられている、その構造的な関係は全く「変わっていない」ということだ。それは、第二次大戦中の「ナチ問題」と今日の「パレスチナ問題」との、「構造は変わっていない」ことにも当てはまるだろう。不遇をしいる側といられる側の構造的な関係は、その立場がどのように入れ替わろうとも、「変わっていない」のである。その「変わっていない」構造的な関係を読み解こうとするとき、吉本隆明が『マチウ書試論』のなかで剔出^{てきしゅつ}した「関係の絶対性」という視点が改めて甦ってこざるをえない。

見田氏は『マチウ書試論』から、「原始キリスト教の苛烈な攻撃的パトスと、陰惨なまでの心理的憎悪感を、正当化しうるものがあったとしたら、それはただ、関係の絶対性という視点が加担するよりほかに術がないのである。」という結語を引用して、「『原始キリスト教』ということばを、『イスラム原理主義』におきかえるだけで、これはそのまま、現代の情況を読み解く格子の一つとなるだろう。」というが、おそらく「関係の絶対性」という言葉に初めて接する者には理解が届きにくいと思われる。吉本隆明が「関係の絶対性という視点」に出会う契機になったのは、「マタイによる福音書」の中の、「偽善な律法学者とパリサイ人にわざわいあれ、なんとなれば諸君は、予言者の墓を建て、正義の人の墓碑を飾りそして言う。もし、われわれが祖父のときに生きていたら、予言者の血を流すために、かれらに加担しはしなかったろうと。諸君は無意識のうちに、自分が予言者を殺したものの子孫であることを立証している。それゆえ、諸君の父祖たちの尺度を補え。蛇よ、まむしの血族よ。諸君はどうしてゲアンの懲罰を逃れられようか。」という一節である。

律法学者やパリサイ人が、「われわれが祖父のときに生きていたら、予言者の血を流すために、かれらに加担しはしなかったろう」というとき、彼らは二つのことを明らかにしている。一つは、マチウ書の作者が喝破しているように、彼らが「無意識のうちに、自分が予言者を殺したものの子孫であることを立証している」点である。もう一つは、彼

らが父祖のときに生きていなかったから、「予言者の血を流すために、かれらに加担しはしなかったろう」といっているだけではないか、という点である。後者について、吉本隆明はこういう。父祖が予言者を殺したことは間違いであった、もし自分がそのときに生きていたら、父祖に「加担しはしなかったろう」と、主張することはできる。「人間の意志はなるほど、撰択する自由をもっている。」からだ。「撰択のなかに、自由の意識が甦るのを感じることができる。」しかし、マチウ書の作者は、「われわれが父祖のときに生きていたら、予言者の血を流すために、かれらに加担しはしなかったろう」という諸君は現に、予言者である私を迫害しているではないか、迫害に加担しているではないか、諸君の父祖が予言者に対して行ったそのまま同じことを、諸君はいまわたしに行っているではないか、と主張しているのだ。

「すべての悲惨と、不合理な立法と支配の味方である現代のキリスト教は、当然この言葉をうけとらなければならない。加担の因果は、秩序というものを支点としてめぐるのである。加担の意味が現実の関係のなかで、社会倫理的にとらえられなければならないのはこのときである。ここで、マチウ書が提出していることから、強いて現代的な意味を抽出してみると、加担というものは、人間の意志にかかわりなく、人間と人間との関係がそれを強いるものであるということだ。」と吉本隆明がいうとき、律法学者やパリサイ人はマチウ書の作者たちを迫害する秩序に加担しているという、人間と人間との関係が強いる現実的な立場に歴然と立っており、その前では、「われわれが父祖のときに生きていたら、予言者の血を流すために、かれらに加担しはしなかったろう」と述べることも、単なる心情の自由な表明にしかすぎない。つまり、彼らの言葉は自分たちの立っている現実的な場所から紡ぎ出されているのではなく、彼らの自由な心情から押し出されているだけのことなのだ。

だから吉本隆明は、「関係を意識しない思想など幻にすぎない」と断言する。「意志による人間の自由な撰択というものを、絶対的なものであるかのように誤認している律法学者やパリサイ派」からすれば、「きみは予言者ではない。暴徒であり、破壊者だ。」と答えることもできるのであり、「この答えは、人間と人間との関係の絶対性という要素を含まない如何なる立場からも正しいと言うよりほかはないのだ。秩序にたいする反逆、それへの加担というものを、倫理に結びつけ得るのは、ただ関係の絶対性という視点を導入することによってのみ可能である。」問題は、「きみは予言者ではない。暴徒であり、破壊者だ。」と答えることができるところにあるのではない。「秩序の擁護者であり、貧民と疎外者の敵に加担している」彼らの前に、秩序に対する反逆者が「暴徒」や「破壊者」として現れざるをえないところにある筈だ。

吉本隆明が「現代のキリスト教」を批判するのも、彼らが「貧民と疎外者にたいし、われわれは諸君に同情を寄せ、救済をこころざし、且つそれを実践している。われわれは諸君の味方である」といかに強調し、そのように振る舞ってみせようとも、彼らの自由な意

志にかかわらず、「かれらが秩序の擁護者であり、貧民と疎外者の敵に加担していること」において、「貧民と疎外者」を苦しめ、迫害していることは「どうすることもできない」のである。人間が生きている情況を決定するのは、人間の自由な意志による選択ではけっしてない。人間の自由な意志の選択が届かない、人間と人間との関係が強い絶対的な現実が決定する、と吉本隆明はいっているのである。そこでは、人間の意志が自由であればあるほど、人間と人間との関係は絶対性のような貌つきをもってやってこざるをえないのだ。

「マチウの作者は、律法学者とパリサイ派への攻撃という形で、現実の秩序のなかで生きねばならない人間が、どんな相対性と絶対性との矛盾のなかで生きつづけているか、について語る。思想などは、決して人間の生の意味づけを保証しやしないと言っているのだ。」この吉本隆明の言葉は、先の「関係を意識しない思想など幻にすぎない」という言葉と共に把握されなくてはならない。なぜなら、これらの言葉は、思想が関係を意識しあじめたそのとき、思想は幻であることをやめて、「関係の絶対性」としての現実を突き動かすことができるようになり、「人間の生の意味づけを保証」するような思想として我々の前に登場することになる、と逆に告げているからだ。全く同じ文脈で人間の自由な意志の選択というのも、その自由な意志が立っている現実的な場所を意識せざるをえなくなったとき、現実（の意志）に加担されて不可避な意志へと転位することになる。

原始キリスト教の以前から、我々が居住するこの人間の社会は、富と力を以て世界を支配する側に対する、不合理な貧困と不遇をしいられている側の敵対図式によって貫かれている。もちろん、律法学者やパリサイ派に迫害されていたかつての原始キリスト教が時代を経て、「貧民と疎外者の敵に加担している」「秩序の擁護者」たる現代のキリスト教として現れてくることがありうるように、迫害する側と迫害される側との敵対図式の位置が入れ替わっても、全くその構造は変わらないことからすれば、その敵対図式の血で血を洗う陰惨な抗争というものは不毛にみえなくもない。どっちもどっちではないかと思ひがちであるが、吉本隆明はそこに「関係の絶対性という視点」を差し挟むことによつて、問題を構造化してみせたのである。

ユダヤ教派に対する「蛇よ、まむしの血族よ。」という憎悪の表現に示される、「原始キリスト教の苛烈な攻撃的パトスと、陰惨なまでの心理的憎悪感を、正当化しうるものがあったとしたら、それはただ、関係の絶対性という視点が加担するよりほかに術がないのである。」というとき、迫害されている側は迫害されているという、どうすることもできない絶対的な現実にあって、そこでの絶望的な叫びは憎悪の表現を限りなく募らせていくしかないではないかということだ。だが、ここで逆に鮮明に浮かび上がってくる関係もある。「秩序の擁護者」として「貧民と疎外者の敵に加担」する側は、律法学者やパリサイ派がそうであったように、「予言者の墓を建て、正義の人の墓碑を飾りそして言う。もし、われわれが父祖のときに生きていたら、予言者の血を流すために、かれらに加担氏はしなかったろう」と必ず主張し、そして秩序の反逆者に向かって、「きみは予言者で

はない。暴徒であり、破壊者だ」と言い放つということだ。

このことは、秩序から迫害され、不遇を強いられている側は、「関係の絶対性」という視点」を導入することによって、自らの「苛烈な攻撃的パトスと、陰惨なまでの心理的憎悪感を、正当化しうる」ほかに術がないのに対して、秩序の擁護者の側は、「関係を意識しない」人間の自由な意志による選択に立って振る舞うことができるということを意味している。つまり、秩序の反逆者は自分たちが迫害されているという、現実における関係の絶対的な一点に立って反逆を繰り出すのに対して、秩序の擁護者は現行の秩序に乗っかっている優位さに立って、現実の関係などみずく、「予言者の墓を建て、正義の人の墓碑を飾」って、反逆者をより一層迫害するということだ。端的にいうと、支配者は反逆者の「関係の絶対性」に立つすべての抵抗を、暴徒や破壊者として圧し潰し、現行秩序の維持を最優先して図るということだ。

この問題に重なるようにして、宮台真司がシンポジウムで次のように発言している。「岡倉天心的な弱者の思想だったアジア主義が、帝国主義的な大陸進出の翼賛思想に成り下がるプロセス」の中に、「すでに力を獲得せし者が、弱者たる過去の記憶にしたがって美的に自らを鼓舞する国粹の営み」の恐ろしさを見出して、アメリカやイスラエルに言及する。「イスラエル人は中東戦争といえば、エジプトにめちゃくちゃやられた第三次中東戦争を思い出します。イスラエルには、遡ればホロコーストの記憶があり、さらに遡ればヨーロッパのキリスト教徒によるユダヤ迫害の歴史的記憶があります。東欧崩壊後も、差別されていた大量のユダヤ人がイスラエルに移住し、イスラエル右派を形成します。彼らはいまも自らが弱者であるとの意識を強烈に抱き、自らを美的に鼓舞する。しかしどうでしょう。いまでは弱者どころか、むしろ強者ではないのか。

すでに力を獲得せし者が、弱者たる記憶を手放さないとの恐ろしさといえば、かかるイスラエルのあり方こそがまさにアメリカの写し絵です。全米ライフル協会やミリシアの戯画を見るまでもなく、この国は今でも連邦派と反連邦派の対立構図を引きずる。140年前には親族や友人が南北に分かれてゲリラ戦で殺し合ったことを思えば、国をなすこと自体が奇跡的です。この奇跡は、南北戦争を挟む米英戦争や米西戦争、遡ればピルグリム・ファーザーズの迫害記憶やネイティブ・アメリカンによる襲撃記憶など、やはり弱者たる記憶に支えられます。その意味で、列強にやられないよう仕方なく親の敵と結束した維新期の日本を彷彿させる。すでに力を獲得せし者が弱者たる記憶にすがる滑稽さは、マイケル・ムーア監督のドキュメンタリー映画『ボウリング・フォー・コロンバイン』(略)に活写されています。

弱者たることを動機づけのリソースとして利用する強者の恐ろしさについて、もう一つ重要なことがある。各種の映画の主題になりましたが、なぜ日系人やネイティブ・ナバホが星条旗の下での兵士たらんと欲するか。これは被差別者の運動が、黒人の公民権運動にしても、女性のフェミニズム運動にしても、少なくとも当初は合衆国憲法を自ら

にも適用してくれという形式をとることに関連します。逆にいえば、合衆国憲法の適用を受ける恩恵はそれほど大きい。だから、自分たちも人権ゲームに混ぜてくれとの運動が起こると同時に、他方で、混ぜてやってもいいが星条旗のために死ねるのかという形で「踏み絵」を踏ませ、戦争動員してきたわけです。

かくしてアメリカは、弱者たる記憶や自意識を利用して、内部的な結束や外部への動員を図る、長い歴史があります。これをどう解除するか。解除に至らなくても、『強国になった弱者』『強国の中の弱者』の思考停止的な突進を、いかに抑止するのか。それが21世紀の重要な課題になっている。」

宮台氏が指摘する「弱者たる記憶」に依拠する強者という問題は、マチウ書のなかの、律法学者やパリサイ人が、「予言者の墓を建て、正義の人の墓碑を飾りそして言う。もし、われわれが父祖のときに生きていたら、予言者の血を流すために、かれらに加担しはしなかったろうと。諸君は無意識のうちに、自分が予言者を殺したものの子孫であることを立証している。」という記述にもみられる。彼らは、「無意識のうちに、自分が予言者を殺したものの子孫であること」を感じ取っているが故に、「予言者の墓を建て、正義の人の墓碑を飾」って、「もし、われわれが父祖のときに生きていたら、予言者の血を流すために、かれらに加担しはしなかったろう」という思い込み（偽りの記憶）に依拠しながら、現行秩序への反逆者を預言者としてではなく、暴徒や破壊者として徹底的に弾圧するのである。

アメリカやイスラエルが充分強者であるのに、アラブ世界の弱者に容赦のない弾圧と攻撃を徹底するのは、「彼らはいまも自らが弱者であるとの意識を強烈に抱き、自らを美的に鼓舞する。」からだ。彼らが自分たちの強者たる現実をみないことと、「弱者たる記憶を手放さないこと」とは同一であり、「弱者たる記憶」に依拠して世界の現実に相対していくなら、周囲の弱者を自分たちに刃向かってくる強者とみなして、たえず攻撃を予防的に仕掛けていくことになるのは避けられない。同じことがマチウ書の世界にも当てはまる。律法学者やパリサイ人が「予言者の墓を建て、正義の人の墓碑を飾」るのは、自分たちを「予言者」や「正義の人」の系譜に連なる者たちに擬するためであり、そうすることによってマチウ書の作者たちを迫害する根拠をかたちづくるのである。

律法学者やパリサイ人が偽りの記憶を手放さないことによって、目の前の原始キリスト教徒に対する弾圧と迫害を徹底するように、アメリカやイスラエルも「弱者たる記憶」に依拠することによって、アラブ世界に対する攻撃を強化する。弱者が「現実における関係の絶対性」に立って熾烈な反撃を試みればみるほど、強者は偽りの記憶や「弱者たる記憶」を現実の関係が見えなくなるまでに大きく膨らませていくという関係図式がそこみられる。現実に乗っかっている強者は、そのことを忘れるようにしてますます架空の世界へと赴き、現実に虐げられている弱者は、そのことの一点に立ち尽くすためにますます現実の世界に固執しようとする。吉本隆明が弱者の抵抗に「関係の絶対性」という視点」

を導入するなら、同じ度合いで強者の弾圧や攻撃に、捏造されていく記憶の絶対性という視点も導入する必要があるかもしれない。

見田宗介が、「 bin Laden のテロリズムも、 Bush 大統領のテロリズムも、関係の絶対性という視点が加担するときに、このように正当化されてしまうという」ことであるなら、「恐ろしい認識ですが、中東の、世紀をこえた血で血を洗う抗争をみれば、そして 2001 年の同時多発テロと、アフガニスタンやイラクへの報復戦争を『仕方のないこと』と考えるアメリカの多数の人々の感情をみれば、直視するほかのない認識であり、「関係の絶対性」という事実が、二千年前も現在も、最も困難な現実問題の基底にあり続いているということを、認識の出発点とするほかはないと思います。」と述べるとき、二つの点で註記しておかなくてはならない。一つは、「関係の絶対性」という視点は弱者の抵抗や憎悪を「正当化しうるものがあったとしたら」と書かれていたように、強者の攻撃にほかならない「 Bush 大統領のテロリズム」に「関係の絶対性」という視点は導入されえないから、「 bin Laden のテロリズムも、 Bush 大統領のテロリズムも」というように並列できること。もう一つは、弱者の「関係の絶対性」という視点ばかりではなく、強者の捏造されていく記憶の絶対性という視点もそこに導入する必要があることだ。

「関係の絶対性」という視点に立つ弱者と、「弱者たる記憶」を捏造していく強者との血で血を洗う陰惨な抗争にアメリカが足を踏み入れていくのは、もちろん、アメリカの踏み入り方が「弱者たる記憶」に囚われ、「弱者たる記憶」がますます剥き出されていくよう駆られるからであるが、見田宗介は 9・11 について、「湾岸戦争でアメリカがあのような勝ち方をした以上、冷戦後の世界の構造の中で、また、中東問題のどうしようもない状況の中で、イスラムのエクストリーミスト（極端主義者）たちの想像力は、あれ以外の方向を考えつくことはないだろうとはじめから思っていました。『あってはならない』ことですが、現代の世界の構造の中でイスラムのエクストリーミストたちの思想の水準と資質の方向性を直視するなら、あのような方向に想像力を引き絞ってゆく一派は必ず現れるだろう、ということです。」と述べて、アメリカの湾岸戦争での「勝ち方」が 9・11 を誘発していることを示唆する。

アメリカの「勝ち方」はアラブ世界に政治的怨念が残るようななかたちであったから、その政治的怨念は 9・11 テロ実行者たちの「思想の水準と資質の方向性を直視するなら」、どうしてもあのようななかたちをとって噴出する以外になかったということだ。アメリカの「勝ち方」がアラブ世界に政治的怨念を残すことになったのは、それがアラブ世界に一つの出口を全くもたらさずに、ますます出口が閉ざされていく絶望感をもたらすことになったからである。もしアメリカがアラブ世界に解放と希望の風穴を開けるような「勝ち方」をしていたなら、政治的怨念は滞留せずに、したがって 9・11 も爆発することはなかった。「一つ前の戦争、つまり冷戦にアメリカは完全勝利したが、あれほど巨大な、イスラム原理主義者の幾千倍の軍事力を所有していたソビエト連邦に勝利しながら、ソビエトの敗

残者による復讐テロなどにアメリカは悩みはしなかった。それはアメリカが前の戦争には、正しい勝ち方をしたからだと思う。勝てばいいものではない。

ソビエトでは民衆がみずから蜂起して、抑圧的な権力を打ち倒したのです。だからロシアの民衆で、アメリカを恨んで自爆テロをしようなどという人はいない。それはアメリカが冷戦を軍事力で勝ったのではないからです。アメリカと西ヨーロッパは、その情報と消費の水準と、なによりもその『自由な社会』であることの魅力性において、冷戦の対手を圧倒したのです。そして解放を求めるロシアと東ヨーロッパの民衆は、じぶんの手で、じぶんの上にのしかかっている抑圧的な権力を打ち倒したのです。」

冷戦後の世界の構造の中で考えると、非常に困難なことが短く語られている。政治的怨念を残さない「勝利の方法」は、解放を求める民衆が、「じぶんの手で、じぶんの上にのしかかっている抑圧的な権力を打ち倒し」といくのに、求められれば手を黙って差し伸べればよいということに尽きる。「タリバンを倒すことができるのはアフガニスタンの民衆だけです。自由と幸福と平和を求めるアフガニスタンの民衆だけであったはずです。世界中に逃げ散ってひそむテロリストたちの息の根を止めることができるのは、アラブと五つの大陸の貧しい民衆だけです。アラブと五つの大陸の貧しい民衆が『おまえはいるない』というときに、はじめてテロリズムはほんとうに消える。」というのは本當だが、そんな教科書通りにいく筈がないから、テロの温床となっている地域をぶっ潰すために強引にでも介入するのだ、というのがアメリカの云い分である。

今のアメリカが、解放を求める民衆が「じぶんの手で、じぶんの上にのしかかっている抑圧的な権力を打ち倒」することを願っているとはとても思われない。なぜなら、その結果、その国が親米政権になるとは限らないからだ。アメリカの「勝ち方」が民衆の自立に手を貸さずに、反米政権が樹立されないことを至上課題としてアラブ世界に介入していくかたちを取るがゆえに、民衆の間に絶望と政治的怨念を滞留させるのである。そして、「関係の絶対性」の問題が9・11のように、「全地球的に拡大されたわたしたちの社会システムを、いまその中心部において崩落せしめようとしているのだ」と見田氏は説き、「関係の形成するこの『憎悪の倫理化』というべきものに対して、烈しい反発と嫌悪の感覚をあらわにしている」ローレンスと、「反逆の倫理を根拠づけるものとして」の「関係の絶対性」という視点を取り出してきた吉本隆明の、その地点からのその後の思想的歩みをみていく。「けれどもたとえば早い時期の吉本の作品のうちの、『まっ赤な悪罵を吐きながら、きみもまた老いさらばえてゆく』という印象的な一節などのなかには、『関係の絶対性』という思想が、たとえば自爆テロのような仕方で死ぬことの根拠となることはできても、生きるということの積極的な根拠としては、貧しいものであるとの的確な予感があります。不当な秩序に屈服することなしに、生き続けることの積極的な思想として吉本がのちに獲得するのが、<自立>という概念でした。<自立>の思想は、<関係の絶対性>の思想の、止揚された形、転回された形といえます。

たとえばアフガニスタンの問題の、真実の『解決』のかたちというものを考えてみることが許されるとすれば、それはアフガニスタンの民衆が、タリバンの圧政からも北部同盟の將軍たちの支配からも自立し、それをとおして、アメリカを中心とするグローバリズムの支配からも自立して、自らの幸福と平和と自由を追求するという方向しかないはずです。アフガニスタンの民衆の自立のために日本やアメリカの高度の情報化／消費化社会の内部の人間がなしうることは、(当面のさまざまな『援助』は有効であるとしても)根本的には、わたしたちの社会自身が自立すること、外部の諸社会、諸地域を収奪し、汚染することのないような仕方で、自由と幸福の持続可能なシステムを構想することでしかないはずです(被支配者の自立のために支配者がなしうことは、支配者自身が自立すること、被支配者への依存をやめることだけである)。」

見田氏自身が続いて、「けれどもこののような、外部を収奪し汚染することのないような仕方で、自由と幸福を永続する社会のシステムというものは、可能だろうか?」と問うているように、なによりもタリバンであれ、北部同盟であれ、そしてアメリカであれ、どの支配者も「被支配者への依存をやめ」ない度合いだけ、自身の自立と被支配者の自立の双方に対する最大の障害物として前に立ち塞がっていることを考えるなら、<自立>の思想が現実の困難な局面を搔い潜って、生の共同原理として立ち現れてくるのは夢の如く思われ、いまだ個々人の内部の構えとしてのみ貫かれていく以外にないのが感じられる。

D・H・ローレンスについては、「その死の床で力をしぶるようにして書き記したという最終章は、書きなぐるように飛躍する文体で、ぼくたちは太陽系の一部分である、地球の生命の一部分であり、ぼくたちの血管を流れているのは海の水である、というようなことが語られて」おり、見田氏は、「ローレンスの語ろうとしているようなことが、何かおかしな幻想ではなく、自然科学的な事実であるだけでなく、人間が自由と幸福を求めるときの、最終的にたしかな根拠となるものであるということを、確認」するのみならず、「このような人間という存在の事実に根拠をおくことによって、自由と幸福を永続的に持続することのできる社会を、外部を収奪し抑圧することのないような仕方で、自立するシステムとして構想することができる」と受けとめる。

シンポジウムでは、加藤典洋の司会で社会学者の橋爪大三郎、宮台真司、見田宗介に哲学者の竹田青嗣が加わって論じ合わされたが、竹田青嗣は、9・11が一挙に照らし出した貧しい国と豊かな国の陰惨な対立が、全く異なる列車間での対立ではなく、「自由競争の原理が徐々に世界大に拡大する」グローバリズムによって、先進国が有利に、後進国がどうしても不利な競争になりながらも、一台の同じ列車に乗っているが故の対立であり、この列車の方向の必然性についての自覚を次のように促す。
「一般的にマイノリティー社会の人間の側から向こう側の豊かな世界がどう見えるか。そこに何があるか、もちろん多くの矛盾も見える、しかしそれ以上に新しい生き方の可能性が見える。特に若い人間にとてその可能性は、強い切望になる。それまでの伝統的

生活が競争原理に巻き込まれて世代間の矛盾も起こる。しかし、にもかかわらず、多くの人間が新しい生活の可能性に強く引かれる。それは虚妄だと言ってもむだです。なるほどこの欲望は倫理的なものではない。しかし誰もそれを非難しえない自然な人間の欲望です。そして、この切望こそ、歴史的な資本主義の拡張性の根本動力であって、資本主義は無理やり移植されてきたのではない。そのことを無視してはいけないわけです。我々はつい、その欲望は実は幻想でむしろ古い生活様式の豊かさを見直すことが大事ではないかと言いたくなる。でもそれはすでによい場所にいる人間の見方にすぎないことが多いのです。

いま、人間の歴史というのはものすごく長い列車が進んでいるようなものです。一番先頭の列車にいる人間は豊かで、むしろ自由がありすぎるのが苦しみの大きな原因であるなどとも言われている。でも一番シッポの方の列車では、まずひどい困窮があり、また古い制度や因襲に固く縛りつけられて最も基本的な自由さえ持てずに苦しんでいる。この落差があまりに大きいために先進国の人間の悩みなどは贅沢なものと思え、また一方が他方の苦しみをつくり出している原因であるかのように見える。両極は対立的なものであり、そういう人間社会のシステム全体が悪いものだと考えたくなる。

しかしそうではないと思います。いま世界は長すぎる不公平な列車になっているが、しかしそれが進んでいく方向自体には大きな必然性がある。後ろの方にいる人間は少しでも前の方に進んでいきたい。前にいる人は豊かさゆえの不幸をかこっているが、それでも後ろの車両に戻りたいという人は決していない。それが、人間がより『自由』でありたいという本性を持つということの意味です。ですから、我々はつい何かが根本的に間違っているのだと考えたくなるし、個別的にはその通りだけれど、むしろこの列車の方向性の本質をよく自覚し、そこから大きなビジョンを立てるのでなくてはいけない。そこで初めて個々の現実的な目標が可能となる。」

人間の自然な欲望が赴く先は皆一様であり、この欲望を「根本動力」として拡張し続ける資本主義という「列車の方向性の本質をよく自覚」するなかから、「どのような自由競争、どのような資本主義ならば、自由な成員の総体がこれを『正当』なものと認めうるシステムであるのか」、そのルールゲームを作り出していくことが問われている、ということがここで語られている。見田氏は各人の見解や提案を受けて、「知識人」としての自分たちの役割は、「社会の不満を代弁するみたいなこと」ではなく、「大事なことは世界を構想することなんだと。どういうふうにしたら本当にいい世界ができるんだということを、構想すること」こそにあり、そのことが「大事なんだ」と強調して、シンポジウムを締め括る。つまり、知識人にとっての眞の実践とは、反戦デモや抗議活動に参加することではなく、<世界の構想>という一点に立ちきることにあるということが、今回のシンポジウムで如実に示されていたといわなければならない。

2003年8月10日記

